*The 3rd World Congress on Inflammation closed successfully
Sei-itsu Murota**

第3回国際炎症学会を終えて

室 田 誠 逸*

第3回国際炎症学会(The 3rd World Congress on Inflammation: Inflammation '97 Tokyo)は、去る1997年11月16日(日)から20日(木)の5日間、東京国際フォーラムにおいて予定どおり開かれ、皆様方の御協力のおかげで無事終了した。水島 裕 会長、京極方久、鹿取 信両副会長以下、組織委員一同ほっと胸を撫でおろしたところである。この国際会議は、六つの特別講演、会長講演、25テーマのシンポジウムおよびポスター展示で構成され、このほかに今話題のCOX-2の臨床応用に関するプレコングレスシンポジウムが加えられた。世界32ヶ国から758名(うち外国人209名)の参加者があった。

日本炎症学会は2,000名をこす会員数を誇っているが、このような例は世界に類をみない。日本においては、炎症研究の重要性が早くから認識され、1979年に早くも日本炎症学会が組織された。炎症研究に携わる基礎研究者、臨床医、製薬企業研究者が文字どおり三位一体となって本学会を育てあげ、日本の炎症研究の牽引車となってきた。その結果、インターロイキン、アラキドン酸代謝物、サイトカイン、ケモカイン、アポトーシスなど多くの分野で世界をリードする研究成果が数多く発表されてきた。15年に及ぶこのような地道な努力と過去の実績は、諸外国から高く評価されることとなり、1993年ウィーンで発足した第1回国際炎症学会で早くも次々期第3回国際炎症学会の日本での開催が要請された。

そこで当然のことながら、私達にはその期待に応えるような国際学会を日本で開く使命があった。鹿取 信プログラム委員長を中心に案が練られ、Inflammation'97 Tokyoはシンポジウムを中心に企画することが決定された。1995年、英国のブライトンで行われた第2回国際炎症学会に、私達は1st circularを持参し、IAIS(International Association of Inflammation Societies) business committeeでInflammation'97 Tokyoの基本方針の了承を取りつけた。シンポジウムのテーマなどプログラムの具体的内容については1996年の夏、4人のIAIS officer(Kay Brune IAIS会長、Roger M. McMillan IAIS副会長、Alan J. Lewis IAIS前会長、Tim J. Williams

* Secretary General of the 3rd World Congress on Inflammation 第3回国際炎症学会事務局長

IAIS 顧問)が視察に来日し、日本の常務組織委員会委員との間で Joint Planning Meeting が開かれた。その席上、私達の素案について 4 人の officer 達から数々の厳しい注文がつけられた。その後私達は、彼らの要求は各国の炎症学会主催のシンポジウムに組み込むことで処理することにした。最終プログラムは、ほぼ私達が当初立案したとおりのものになった。つまり私達は学術プログラムに関しては外からの干渉を最小限にとどめ、開催国の自主性を守ることにしたのである。これは、結果的に本学会の成功につながった。各シンポジウムの日本側 chairman には、その領域の第一人者をお願いしてなっていたので、必然的に世界超一流の co-chairman が選ばれることになり、その結果、現在最先端を走っている最高のシンポジストがずらりと勢揃いすることになった。まさに壮観であった。海外からの参加者が異口同音にきわめてレベルの高い国際学会で十分満足したと褒めてくれたのも頷ける。また、日本の炎症研究のレベルの高さに認識を新たにしたりした人も多かった。鹿取 信プログラム委員長の慧眼のほどに畏敬の念を禁じえない。

会場と当日の学会運営もきわめて好評だった。富岡玖夫展示委員長が自らの過去の会長経験を活かして、ポスター会場をきわめてくつろげる空間に設営して下さった。そのおかげで昼休み 2 時間のポスター討論時間には、連日黒山の人だかりであった。軽食や、本格的淹れ立てコーヒーサービスを楽しみながら談笑し、討論する姿が終日絶えなかった。星 恵子ソーシャル委員長企画のレディースルールの生花や折り紙指導も好評であった。前日の雨模様が一転して晴天に恵まれた箱根ツアーも好印象を与えたことであろう。昨今の不景気ならびに規制の強化で、もっとも苦労されたのは市川陽一財務委員長であった。削るべきところには厳しくメスを入れ、使うべきところには思い切って予算を計上する決断力は見事であった。水島 裕会長も自ら率先して東奔西走してくださったが、寄付金の集まりは時世を反映してか、極端に悪かった。最終的に大赤字にならないことを祈るのみである。

この国際学会について、もちろん反省すべき点も大いにある。まず参加者数が予想より少なかったことがあげられる。このことは多くの外国人にも指摘された。どうしてこんな素晴らしい内容の会議なのに日本人はもっとたくさん聞きにこないのか、彼らの率直な感想であった。一度に三〜四つのシンポジウムを同時に走らせたことも聴衆を分散させることにつながったし、聞きたい演題が重なってしまうことにもつながった。東京国際フォーラムの構造上、各会場間の移動に時間がかかりすぎるという不満の声も多く聞かれた。なぜ例年の日本炎症学会のように大勢の会員の方が会場に来て下さらなかったのか、私達も大いに反省しているところである。

実際に会議が始まってしまうと、なんら問題らしきことも起こらずにあっという間

に終わってしまった。拍子抜けの感さえあった。20 回にも及ぶ常務組織委員会を開き、毎回夜遅くまで議論し、ときには見解の相違から激論をたたかわせたことも、いまとなっては懐しい思い出となった。裏方として本国際学会の遂行を支えて下さった事務局 PMSI ジャパンの皆様にも感謝の意を捧げたい。

次回の第 4 回国際炎症学会は、1999 年 6 月 27 日～30 日にパリで開催される予定である。フランス炎症学会はどのような独自性を出してくるだろうか。いまから楽しみである。日本からも多数参加されることを期待したい。